

洋畫の將來

黒田清輝氏談

日本と西洋を比較して、美術趣味が孰れに多く普及されて居るかと云ふ事に就いて、私だけの見る所では、日本の方が遙かに立優つて居ると思ふ、勿論繪畫に就ての鑑識とか、嗜好とかの深い事になつては、孰れの國にも多少其方の教育と云ふものがあり、専門的の一部分に限られるは止むを得ぬが、一般に趣味の廣い事から見れば、日本程廣く行き亘つて居る國は、世界各國殆んど其比が無いと云つて宜しいので、之は勿論久しい間の慣習とか、教育に依つて斯の如きを得たのであらう。然るに明治の大改革は總ての事を悉く革命的に破壊した中、繪畫も亦た其例を免れず、局面が全く一變して今日の姿になり來つた譯であるから、今まで兎に角一つの花園であつたものが、茲に規模を更に大にすべき爲の新計畫が出來、其の結果今まで根を張つて居つた草花其他の花などをば、其のまゝに養ひ立てる事が出來ず、悉く掘り返して了つた杯云ふ次第で、要するに在來の花卉には、餘程の損害を及ぼした、そして其一方に新たな種子も蒔いては見たが、夫は未だ日が淺いので、恰好な花も咲く程にならぬ、其處で前の花園を大變惜がつて居た人が、夫れを失なつた爲に、涕を流すのは勿論の事で、將來に於ても今までと同様な花を見やうとするは或は六づかしからう、夫は六づかしからうが其代り今までは種子の無つた、新らしいものが、今迄よりも一層美しく、又た立派な花として咲く時期があると信ずる。併し唯だ蒔放して花が咲くかと云ふに、決して左様ではない。元來此の日本の國否な此花園が、花の植付、生長等に最も適當した圃と云ふ事は、小規模

な時に、充分之れを證據立て、居つたのであるから、今若し此の計畫を土臺として、此の計畫通りに、又た此計畫に添ふ丈けの力を用ゐて栽培したならば、他日三十年五十年の後に見られる花は、恐らく今日以前の花園を慕つて居つた人の歎きを、取返へして餘りがあるだらうと思ふ。

兎に角今日までは創業時代であるから、掘返した土は極めて新らしい、苔も生いてない、或は見る可き草花さへもない、併し此後追々と伸びて来るやうな姿となる、夫れを伸びさすには、眞物の花の栽培と同じで、唯だ種を蒔いた丈では可かぬ、計畫が大きければ費用も澤山に要る、所が遺憾な事には、今までの國民には、之れ丈けの餘裕がなかつた爲に、兎角計畫した處の計畫を、完成するまでに至らなかつた、又た其責任のある當局でも、たまで骨を折る丈けの餘裕がなかつたかと思はれる。又は計畫があつても、一向手を付けずに打捨て、在つたやうな傾きもあつた、併し夫は過去の事で、今年は文部大臣の計畫で、官立の展覽會も開かれ、美術の奨励もあるやに聞いて居るから、之などは非常に立派な結果を將來に見得るべき、一の有力な肥料たるべきであらう。實際この美術趣味の普及に就ても、今日では一見一般に普及されて居らぬかのやうに見ゆる處があるかも知れぬ、然し之は前述べた通りで、花園は一旦掘返へされたが、國民の思想の中には、美しい花の種子は充分に宿つて居る、東西を比較すれば、我國が西洋の孰れの國にも優れて居る事は之れ亦た前述の通りで、將來に於ても日本の國ほど、綺麗に花の咲く所は多く無からうと思ふ。兎に角いやが上にも此趣味の普及は大切なので、其方法は兎に角今日の日本の勢に適し、將來また外國と頭を並べて、進んで頭を準等に抽んづる丈の設備がなければならぬ、此設備に就いても政府は國民と共に、骨を折るが一番の急務であらう。

更に之を畫工の境遇から云へば、畫工其のものは繪畫と同じもので、即ち栽培者ではなく、被栽培者、即ち種子又は花である。夫で畫工として願ふ所は、矢張り種子が大きくなつて、早く立派な花が咲きたい、そして以前の花よりも結構な花になつて、人に見られたいと思ふ事である、所が今日までは、唯だ此花に、花と云ふ程の花も咲かず、又た咲く事が出来なかつたので、僅に以前と變つた、怪しげな變形の花が咲く丈けに止つた、然るに世間では此の變形の花を見ると、先づ詰らぬと云ふ、之が花だらうかと怪む次第である、成程此花を此儘で見れば、一向下らぬものかも知れぬけれど、之に適當な肥料が加はり、又た充分な手入れがあつたならば、此花とても始終今日の姿でない事は極めて明かである。例令ば松のやうに大木になる本ですらも、二葉の間は普通の草にも劣る姿である、然し乍ら將來大きくなる可きものと、大きくなる可らざるものとは、自然其處に、種子の中に自ら異なる所があるから、大きくして見る望みがあれば、之を葉の中に彼是れ批評し、又は踏付けて了つては、假令其ものがどんな他日の望みを持つて居るものでも、到底笑ひの中に葬られるに過ぎぬ。

偕て之までは一般に繪畫と云つて居けれど、夫は予の専門にして居る洋畫に關した事で、自分は此の洋畫なるものが、將來に於ても日本の國內で、一種の立派な發達を爲すべき事を期して居り、進んでは將來に於て、世界と競争するのみならず、世界を凌いで行くものと思ふ、斯ふ云ふと、日本畫に就ては、全く趣味を持たぬ計りか、全く値がなく考へられるが、決して左様ではない、物には何事にも時勢と云ふものがある、時代の要求と云ふものがある、盛衰消長と云ふ事がある、何ものも時勢に反抗して勝つ事は出来ぬ、春に咲く花を、夏に咲かせうとても夫は無理だ、何程肥料をやつたにしても、同じ花の全盛を、何時まで繼續させる事は出来ぬので、已に咲いて終つた花

は、矢張咲いて了つた花として散つて了はねばならぬ、之を何處の國にしても、何時までも盛んな時計りを維持してゐる事は出来ぬ、支那は文明の時もあつたが今は如何だ、日本でも同じ將軍家でも、人により時により盛衰はあつた。たとへ同じ政治をやつた處が、同じやうな結果は決して來るものではない、斯う云ふ理由から、今日の時勢に於て以前にあつた花よりも、更に立派な花を求めんとするには、古木に肥料を施して、再び全盛の花を見やうとするよりも、寧ろ新たな種子を下して、新たな變つた花を見やうと企つる方が適當であらうと信ずるのである。

『日本及日本人』四五九明治四〇年五月二十五日